

(2) 西土佐中学校

学 校 長 大塚 明人
校内研究代表者 宮本 教子

1. 研究主題

「レッツチャレンジ西土佐っ子」
[自ら学び、かかわり合い、自分の思いを表現できる生徒の育成]
～見方・考え方を働かせて思考を深める授業づくり～

2. 主題設定の理由

昨年度は「自ら学び、かかわり合い、自分の思いを表現できる生徒の育成～授業スタンダードを意識した授業づくり～」をテーマとし、通常学級の中で支援の必要な生徒をはじめとして、生徒一人ひとりの実態に合わせた授業づくりをベースに取組を行ってきた。生徒のアンケートでは、「学習課題・めあての設定」や「授業の見通し」に関する項目の数値に伸びが見られるなど、一定の成果が見られた。しかしながら、生徒の主体性を引き出すことのできる単元計画・授業づくりには依然課題が多く、各種学力調査でも学力面の課題が残る結果となった。また、昨年度の各種アンケート調査では以下のような課題が明らかになっている。「学校が楽しい 73%」「人が困っていたら助ける 70.6%」「自分と違う意見について考えるのは楽しい 63.6%」「地域や社会をよくするために考える 50%」いずれも全国比より大きく下回っている。

この現状を踏まえて、本指定事業の連携教育を中心として取り組むことで、安心安全な学校生活の中で1人1人の生徒の自己肯定感を高め、地域に根ざした学びを土台として自立して社会を生きていく力をつけていけると考えている。この生徒の自立には、確かな学力が欠かせない。その点においては、「自ら学び、かかわり合い、自分の思いを表現できる生徒の育成～見方・考え方を働かせて思考を深める授業づくり～」の校内研究テーマに基づいた実践研究が必要であり、上記のような研究主題を設定した。

3. 研究仮説

保・小・中・高・地域の連携した取組の中で、生徒1人1人の自己肯定感の高まりや故郷を愛する気持ちを醸成することと並行して、組織的に「見方・考え方を働かせ思考を深める」授業の実現に取り組むことで、生徒が将来自立して生きていく力をつけていけるであろう。

4. 研究の進め方と方法

- 西土佐地域の子どもたちの実態を関係者で共有し、つけたい力と目指すところを明確にして、各校所・地域との連携した実践研究を推進する。
- 保・小・中・高・地域の連携の取組を進める体制を整備し、実践内容や協議内容を地域等に広く発信して啓発を行う。
- 全校授業研とチーム会を授業改善の中心として位置づける。特に各教員が教科の枠を超えて自分事として取り組んでチーム会の充実を図ることで、「見方・考え方を働かせ思考を深める」授業を行う。また、毎週の校内研・職員会の冒頭の校長からの時間を活用して、1週間の授業参観のフィードバックを行う。
- 通常学級での支援の必要な生徒に視点を当てた研修を行い、UDの授業づくりを全教職員で確認・共有し実践する。
- ICTの効果的・積極的な活用をすすめ、個別最適化の学びをつくる。
- 安心・安全な学級・学校づくりを実現するために、「つなぐ・つながる」を共通の視点とした工夫ある学級経営を行う。

①〈保・小・中・高・地域連携教育の取組〉

(ア)「めざす子ども像」「つけたい力」の絞り込み

高知学園大学の山下文一学長を講師に招き、連携教育の必要性について研修を深めた。3校所の教職員のほかに、学校運営協議会の会長やSCも参加し、地域全体でどんな子どもたちを育てたいのかを話し合った。西土佐地域の子どもたちの良さや、「もっと伸ばしていきたい」資質・能力を出し合い、その後、「めざす子ども像」を「レッツ チャレンジ! 西土佐っ子 ～西土佐を愛し 自分の思いをもって行動する 子ども



の育成～」とし、「自立心・チャレンジ精神・自己肯定感・コミュニケーション力・郷土愛」の5つの資質・能力の育成に取り組み、連携教育の中心に据えていくことを確認した。また、5つの資質能力の育成に向けて、どのような取組を各校所で行っているかを共有する会も実施した。

(イ) 合同研修会と部会の取組

年4回の小中合同研修では、知徳体のそれぞれの課題について話し合いを持ち、情報を共有した。知の部会では「自主学習」の取組を小中で交流して行った。徳の部会では小中エンカウンター交流を行うなど自己肯定感や自立心を高める取組について協議し、実施した。

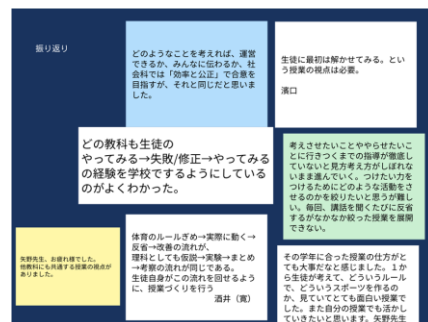
②〈保小中高地域連携教育の体制の整備〉

昨年度まで、合同研修の内容の打ち合わせは小と中の2校で行うことが多かったが、本年度より保育所も参加し、互いの教育課程について話し合う機会を多く設けた。また、これまで小学校教員だけが参加していた公開保育に中学校の全教員も参加することで、保育所での活動が、中学校でつきたい力にどのように関わってくるのかを考える機会とした。連携教育の体制を整備しなおすことは、互いの教育活動を知ることで、子どもたちの発達段階に応じた取組を考えることにつながった。



③〈見方・考え方を働かせた授業づくり〉

授業づくりの柱として「生徒を中心にした主体的な授業にするための課題づくりの工夫」「課題と生徒・生徒と生徒・教師と生徒がつながる授業にするための 関わり合いの工夫」「見方・考え方を働かせ、思考を深めるための解決活動の工夫」の3点をあげ、チーム会での検討や模擬授業、授業公開などを行った。「生徒を中心にした主体的な授業にするための課題づくりの工夫」では、生徒自身の気づきや困り感・疑問を出発点に組み立てていく授業づくりを意識し、チームで単元計画や授業課題の検討を行った。「課題と生徒・生徒と生徒・教師と生徒がつながる授業にするための 関わり合いの工夫」では生徒一人一人に合わせた支援の仕方を知るために、高知大学の是永教授を招き、生徒の実態を踏まえた授業づくりを意識した。「見方・考え方を働かせ、思考を深めるための解決活動の工夫」では、指導主事や専門の講師を招き、学習指導要領に関する理解を深めた。また、授業で効果的に ICT 活用を推進するために、ロイロノートの活用等を研修に取り入れた。



5. 今年度の成果と課題

【成果】

- チームでの授業改善では、課題を明確にしながら取り組み、生徒授業アンケートでは右の表のような成果が見られた。
- 保小中高連携を推進し、共通の課題を共有し、教職員の課題意識を統一できた。また、めざす子ども像と育てたい資質能力の決定により、方向性を統一できた。

【課題】

- 学力調査等の結果において、学力に関わる課題が改善できていない。
- 総合的な学習の時間を柱とした保小中高地域連携の取組に向けたカリキュラムの見直し。

【来年度に向けて（改善策）】

- 総合的な学習の時間を柱とした保小中高地域連携の取組に向けた教科横断的なカリキュラムの見直しと実践。
- 生徒の主体性を引き出すことのできる単元計画・授業づくりの継続。

項目	7月	12月	増減
これまでのまとめ・振り返りをもとに「学習課題・めあて」を設定することができた	41.6	57.1	+15.5
授業で学んだこと（方法等）は他の学習や普段の生活でも使えると思う。	48.3	63.1	+14.8
相手や目的に応じて自分の考えと、その根拠を明確にし、表現することができた。	44.1	54.1	+10.0